

# イエス・キリストの啓示 - 第十

## 天上の戦い

Jeff Pippenger

2023-11-03

キリストとルシファー（光をもたらす者）との大いなる争いは天で始まり、神は猶予の時を許された。ルシファーが自らの反逆を広めたとき、光をもたらす者の反逆の結果が明らかになるための期間が与えられた。神が猶予期間の終わりを定められたとき、ルシファーの名は光をもたらす者ルシファーから、サタン（敵対者）へと変えられた。サタンとその反逆に加わった天使たちにとって猶予期間は終わり、彼らは天から追放され、永遠の火に定められた。

そのとき、彼は左側にいる者たちにもこう言う。「呪われた者たちよ、わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために備えられた永遠の火に入れ。」マタイによる福音書 25章41節

キリストとサタンとの大いなる争いは、その後エデンの園にも及び、神は再び猶予の時を設けられた。サタンが死とその木の実について神は嘘をついていると告発し、エバを誘惑して自分の反逆に加わらせたとき、天においてそうであったように、サタンの反逆の実が地上に現れるのを許すため、再びある期間が与えられた。そこでサタンは「悪魔」というもう一つの名を受けたが、それは「告発者」を意味する。猶予の時（サタンの反逆に加わったアダムの子らのための）が終わるとき、そのアダムの子らは永遠の火に処せられるとの宣告を受ける。

そして天で戦いが起こった。ミカエルとその天使たちが竜と戦い、竜も自分の天使たちとともに戦ったが、勝てなかった。もはや天に彼らの居場所は見いだされなかった。こうして、その大きな竜、すなわち全世界を惑わす、悪魔ともサタンとも呼ばれるあの古い蛇は投げ落とされ、地上に投げ落とされた。彼の天使たちも彼とともに投げ落とされた。ヨハネの黙示録 12:7-9

大いなる争いの初めにおける天での戦いは、大いなる争いの終わりにおける戦いを示している。なぜなら、アルファとオメガは、いつも物事の始まりをもってその終わりを示すからである。天で起こった戦いの記述は、天に現れた大いなるしるしによって始まる。

また、天に大いなるしるしが現れた。太陽を身にまとい、足の下に月があり、頭には十二の星の冠をかぶった女がいた。その女は身ごもっており、産みの苦しみのために叫び、出産の痛みにもだえていた。黙示録 12:1、2

キリストとサタンの間の大いなる争いの最後の戦いは、まだ猶予期間が有効である間に起こる。その戦場は『イエス・キリストの黙示』において天にあるものとして示されている。この真理はいま封印が解かれつつある。使徒パウロは三つの天について語っている。

使徒パウロは、キリスト者としての経験の初期に、イエスに従う者たちに関する神の御心を学ぶための特別な機会が与えられた。彼は「第三の天に引き上げられ」、さら

に「樂園に引き上げられ、人が語ることを許されていない言葉を聞いた」。彼自身、多くの「幻と啓示」が「主から」自分に与えられたことを認めている。福音の真理の諸原則に対する彼の理解は、「最もすぐれた使徒たち」に劣らなかった。コリント人への第二の手紙 12:2, 4, 11. 彼は「知識をはるかに超えたキリストの愛」の「広さ、長さ、深さ、高さ」を明確かつ十分に理解していた。エペソ人への手紙 3:18, 19. 使徒行伝, 469.

大いなる争いの始まりにおける戦いは第三の天で始まり、大いなる争いの終わりにおける戦いは第一の天で終わる。天は三つあり、第一の天は惑星地球の大気を表す天である。第二の天は太陽、月、そして星々の領域である。第三の天はホワイト姉妹が「パラダイス」と呼んだもので、神の御座のある場所を表している。光の担い手であるルシファーが反逆を開始したのは、まさに神の司令中枢の御前であった。

第三の天は、ホワイト姉妹を含む幾人かの預言者が幻のうちに引き上げられた場所である。パウロがそこにいたとき、彼は、2020年7月18日に通りで打ち殺されていた干からびた骨の覚醒の歴史と、十四万四千人の誕生に続く出来事を見せられた。パウロはその歴史を語ることを禁じられた。というのも、その歴史は「口にすることが許されない」歴史として示されたからである。パウロは、黙示者ヨハネがイエス・キリストの黙示の幻を受ける三十年余り前に亡くなった。ヨハネもまた、パウロと同様に、七つの雷が「語った」ことを聞いたが、彼もその「語られた」ことを書き記すなど言い渡された。七つの雷が「語った」内容は、二人の証人が通りで死んでいた象徴的な三日半が終わるまで封印されたままであることになっていた。

七つの雷がその声を発したとき、私は書き記そうとした。すると、天から声がして私に言った。「七つの雷が語ったことを封印し、それを書き記してはならない。」ヨハネの黙示録 10:4

すべての預言者は、調査審判の「終わりの日々」について証ししており、その「終わりの日々」は具体的に2001年9月11日に始まり、今や印づけが始まる時点に到達している。印づけは、殺された二人の証人が通りに横たわっていた象徴的な三日半の終わりに始まる。すべての預言者は互いに一致している。パウロは、第一の天で起こる最後の猶予期間の戦いの戦場を見た。第一の天の中で起こる最後の猶予期間の戦いの戦場は、第三の天で起こった最初の猶予期間の戦いの戦場に対応している。これらの戦場を、猶予期間の戦いの戦場だと特定することは、不要に見えるかもしれないが、最初の戦いではキリストの敵対者であり、最後の戦いでは十四万四千人の敵対者であるサタンは、自分の時間が短いことを知っている。彼はそれが猶予期間の枠内で行われる戦いであることを知っている。私たちはどうだろうか。

1840年に、力ある天使が降り、第一の天使のメッセージに力を与えた。その世代のプロテスタントたちは試みられ、バビロンの娘たちと名指しされて反逆の名を負わされるに至った。ルシファーの名もまた、その試みの猶予期間中に変わった。1840年に降りた力ある天使は、2001年9月11日に降りた黙示録18章の力ある天使を予表していた。1840年には調査審判はまだ始まっていなかった。というのも、それはなお四年先のことだったからである。しかしプロテスタントたちは、それでも生きている者の審判の予言的表象を示した。1840年に天使が降りたとき、彼らの試みの猶予期間が始まったからである。2001年に黙示

録18章の天使が降りたとき、天における審判は、死者の審判から生者の審判へと移行した。

2020年7月18日、第一天使の運動の第一の失望によって予表されていた、第三天使の運動にとっての第一の失望が到来した。初期の運動では、プロテスタントの試しの過程は第一の失望という道標で終わり、その後に第一天使の運動の試しが始まった。2020年7月18日には、裁きの過程はさらに一步前進した。というのも、三日半の荒野の終わりに到来するはずのそのメッセージは、真夜中の叫びのメッセージの完全かつ最終的な成就となるだけでなく、預言的に十四万四千人の封印の到来をも標するからである。

そして、イスラエルの神の栄光は、それがとどまっていたケルブの上から上り、家の入口の敷居へ移った。彼は、亜麻布を身にまとい、腰に書記の墨入れを帯びた人を呼んだ。主はその人に言われた、「町のただ中、エルサレムのただ中を通り、そこで行われているすべての忌むべきことのために嘆き、叫ぶ者たちの額に印を付けよ。」エゼキエル書 9:3, 4

十四万四千人への印づけの過程は、彼らの誕生時、すなわち彼らの復活の時に始まった。四方の風のメッセージは、死んで干からびた骨に命を与える。また、四方の風のメッセージとは、十四万四千人への印づけのメッセージである。パウロとヨハネは、私たちが今生きているまさにその歴史、すなわち「多くの預言者や義人が見たいと願った」歴史をともし見聞きした。それは、第一の天使の力強い運動によって予表されていた、第三の天使の力強い運動の歴史である。

1840年から1844年に与えられたすべてのメッセージは、今こそ力をもって示されるべきである。多くの人々が方向を見失っているからである。これらのメッセージは、すべての教会に届けられなければならない。

キリストは言われた。「あなたがたの目は見ているので幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているので幸いです。まことにあなたがたに言います。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ていることを見たいと願いながら、見ることができず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながら、聞くことができませんでした」[マタイ 13:16, 17]。1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いです。

「そのメッセージは与えられた。そして、時のしるしが成就しつつあるゆえに、そのメッセージを繰り返して伝えることに遅れがあってはならない。終結の働きは成し遂げられなければならない。大いなる働きが短期間に行われるであろう。まもなく、神の定めにより、大いなる叫びへと膨れ上がるメッセージが与えられるであろう。そのとき、ダニエルは自分の分に立って、証しをするであろう。」原稿公刊集 第21巻 437頁。

天におけるルシファーの最初の戦いの主要な主題は、コミュニケーションだった。彼は光の担い手であり、その地位を用いて聖なる天使たちの心に誤りを忍び込ませた。彼の反逆的な考えを取り入れた天使たちは、最終的に神について抱くようになった考えを自分たちに抱かせたのがルシファーであったことにさえ、気づかなかつたと伝えられている。彼は園でイヴに対したときと同様に、あまりにも巧妙だったため、かつて聖かった天使たちは、サタンが彼らの心に植え付けた思いを自分の独自の考えだと信じるようになった。

そうして蒔かれた種は、やがて永遠の滅びという実を結んだ。

第一の天で起こる最後の戦いが、まさに始まろうとしている。それは聖なる天使たちの誘惑のことではなく、サタンがエバを誘惑したことででもない。むしろ、天にあるものとして表されている墮落した通信手段を通して、彼が全人類を誘惑することに関するものだ。それは、サタンが人々に考えを刷り込むために用いるワールド・ワイド・ウェブのことであり、人々は自分たちが偽りを信じ込まされたことに気づかないまま、そうすることによって自分たちが真理を愛していないことを示してしまう。『終わりの時代』には、人々が『真理』への愛を持たないために偽りを受け入れることになると述べたのは、使徒パウロであった。というのも、彼はこのサタンの驚くべき業が成し遂げられる、その歴史そのものを見ていたからである。

人類の惑わしは、竜の勢力である国連のグローバリストによって行われる。預言において、国連のグローバリストは王たちと商人たちから成る。王たちは各国の政府であり、テクノロジー大手や多国籍の億万長者たちが商人である。

戦いは日曜法において始まり、その時点でアメリカ合衆国は十人の王の筆頭となる。その時、アメリカ合衆国はちょうど竜のように語ったところであり、こうして地の獣の第六の王国の終わりを画する。続いてアメリカ合衆国は、獣の前で行うことになっている奇跡、すなわち天から火を降らせると描写される奇跡によって、全世界を欺くために出ていく。

また、彼は大いなるしるしを行い、人々の目の前で天から地上に火を降らせる。黙示録 13:13.

通りで殺された死者の干からびた骨がよみがえり、旗印として天に掲げられるとき、同時に天では別の驚くべきしるしが現れる。

また、天に別のしるしが現れた。見よ、七つの頭と十の角を持ち、その頭々の上に七つの冠をかぶっていた大きな赤い竜であった。黙示録 12:3

大きな赤い竜はサタンであり、異教ローマでもある。

このように、竜は第一義的にはサタンを表しているが、第二義的には異教ローマの象徴である。『大争闘』439頁。

竜はサタンであり、二次的な適用においては竜は異教ローマを表す。キリストの誕生の歴史においては、異教ローマの竜が表されている。しかし、竜の完全な預言的適用は「終わりの日々」にある。「終わりの日々」には、竜は国際連合の十人の王たちによって表される。彼らが現れるのはキリストの誕生の歴史ではなく、その誕生がキリストの誕生によって予表された十四万四千人の誕生の歴史においてである。

「王や支配者や総督らは、自らに反キリストの烙印を押し、聖徒-すなわち神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持つ者たち-と戦いを挑みに行く竜として表されている。」牧師たちへの証言、38.

竜の十本の角はその連合の象徴であり、冠を戴いた七つの頭は、ダニエル書二章のネブカドネツアルの像および黙示録十七章の八つの頭において示されている聖書預言の八つの王国における第七の頭であることを指し示している。国際連合は、死に絶えた乾いた骨の谷を通り抜ける道で生まれ出た旗印が天に掲げられるまさにその時、「天にもう一つのしるし」である。竜と女は日曜法の時に天におけるしるしとして現れ、それはまた、カトリックの海の獣について人々が「驚嘆して後に従う」まさにその時でもある。

そして、獣の頭のうちの一つが死に至るほどの傷を負ったかのように見えたが、その致命傷は癒された。すると、全地の人々は獣に驚嘆して従った。ヨハネの黙示録 13:3

世界は、その致命的な傷が癒された「後に」教皇制の海の獣に驚嘆して従う。その傷はアメリカ合衆国における日曜法のときに癒される。旗印と竜と獣は、アメリカ合衆国における日曜法を起点として、皆ひとしく人々に驚嘆され、従われる。偽預言者は、まさにその同じ時に、サタンの奇跡のうち最も重大なものを現す。というのも、彼が「竜」のように語り始めたばかりのその日曜法の直後に、全世界を欺くために出て行き、その欺きを天から成し遂げるからである。

そして私は、地から上ってくる別の獣を見た。それは子羊のような二本の角を持ち、竜のように語った。彼は第一の獣の前でそのすべての権威を行使し、致命的な傷が癒されたその第一の獣を、地とその中に住む者たちに礼拝させた。彼は大いなるしるしを行い、人々の見ている前で、天から地上に火を降らせた。黙示録 13:11-13

第三の天で始まった戦争は、第一の天で終わる。竜と獣と偽預言者の三者連合は、聖書と預言の霊によって、邪悪な同盟として特定されている。日曜法の時、この三者連合は、ハルマゲドンへ向けて進軍しながら、女に対する戦いへと全世界を導き始める。日曜法の時、彼らは第一の天の戦場に布陣し、そして敗れる！ローマは世界史の中で三度台頭し、そのたびに、まず敵を征服し、次に同盟者を征服し、さらに獲物を征服し、そして倒れる。

そして私は、蛙のような三つの汚れた霊が、竜の口から、獣の口から、また偽預言者の口から出てくるのを見た。というのは、それらは奇跡を行う悪霊であり、地上の王たち、すなわち全世界にいる王たちのもとへ出て行って、全能の神の大いなる日の戦いに彼らを集めるためである。見よ、わたしは盗人のように来る。目をさまして自分の衣を守っている者は幸いである。そうすれば裸で歩き回ることがなく、その恥を見られることもない。そして、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる場所に、彼らを集めた。ヨハネの黙示録 16:13-16。

「終わりの日々」における「天での戦い」は比喩ではない。それは天において展開される情報戦である。竜の口、獣の口、偽預言者の口からは、「奇跡」を行う「悪魔の霊たち」が出てくる。「spirit」という語は「息」を意味し、その息はメッセージの象徴である。エゼキエル書三十七章の息は、死んだ骨に命を与えるが、それは、聖書では東風として表されるイスラム教のメッセージを届けることによって行われる。「Spirit」「wind」「breath」は、ヘブライ語でもギリシャ語でも、同じ語が英語ではこの三つに訳されている。

主は、まことにご自身に仕えたいと願うすべての魂に新しいいのちを吹き込み、祭壇から取った火のついた炭でその唇に触れて、主の賛美を雄弁に語る者としておできになる。幾千の声が、神の御言葉の驚くべき真理を語り出す力に満たされるであろう。ども舌は解き放たれ、臆病な者は強められて、真理のために勇敢に証しする者とされるであろう。どうか主が、ご自分の民を助けて、魂の宮からあらゆる汚れを清めさせ、また、後の雨が注がれるときそれにあずかることができるほど、主との親しい交わりを保たせてくださいますように。Review and Herald, 1886年7月20日

「竜の口から、獣の口から、そして偽預言者の口から出てくる『霊』は、サタンのメッセージを表している。第三の天における最初の戦いでは——墮落した光の担い手に象徴されるように——それは歪められた情報伝達であった。第一の天における最後の戦いでも、それは再び歪められた情報伝達である。第三の天の戦いでサタンが用い、第一の天の戦いでも再び用いられるその歪められた情報伝達とは、メスメリズム、すなわち現代では催眠と呼ばれるものであった。」

男女は、彼らと関わる人々の心を虜にして支配する術の学問を学んではならない。これはサタンが教える学問である。私たちはその類のものは一切退けるべきである。本来の地位を失い、天の宮廷から追放された者の学問であるメスメリズムや催眠術に、私たちは手を出してはならない。原稿86、1905年。

今日の世界では、テック大手がワールドワイドウェブを通じて催眠術を実行している。ここでは「現代広告の科学」と称されるものが用いられているが、実際には、古来のサタニックな催眠術の科学が究極に洗練されたものにほかならない。グローバリスト、テック大手、そして億万長者たちは、すでに世界中に張り巡らされた欺瞞の「網（ウェブ）」で獲物を捕らえようとしている。いわば、全世界に対するサタンのPsyOpsである。世界をハルマゲドンへと導くのはサタニックなメッセージであり、そのサタニックなメッセージは、三人の天使が天でキリストのメッセージを告げるのとまさに同時に、天において宣べ伝えられている。

そして私は、天の中空を飛ぶもう一人の天使を見た。彼は、地に住む者、あらゆる国民、部族、言語、民族に宣べ伝えるための永遠の福音を携えていた。彼は大声で言った、「神を恐れ、彼に栄光を帰せよ。彼の裁きの時が来たからである。天と地と海と水の源を造られた方を礼拝せよ。」また、別の天使が続いて来て言った、「倒れた、倒れた、大いなる都バビロンは、彼女はその淫行からくる怒りのぶどう酒をすべての国々に飲ませたからである。」さらに第三の天使が彼らに続き、大声で言った。「もし誰でも獣とその像を拝み、額か手にその刻印を受けるなら、その者も、薄められることなく彼の憤りの杯に注がれた神の怒りのぶどう酒を飲み、聖なる天使たちと小羊の前で火と硫黄によって苦しめられる。彼らの苦しみの煙はとこしえに上り続ける。獣とその像を拝み、その名の刻印を受ける者は、昼も夜も安らぎを得ない。」

ヨハネの黙示録 14:6-11.

三者連合のそれぞれの構成員から出る「霊」は、彼らの口から発せられる。国家の発言は、その政府の行為である。

「国家の発言とは、立法府および司法府の行為である。」『大論争』443頁。

エレミヤは、麦ともみ殻を選び分け、もみ殻に戻らなければ（たとえもみ殻のほうが彼のもとに戻って来ることはあっても）、神が彼を御自分の「口」とされる、という約束を与えられた。

私はあざける者たちの集いに座らず、喜びもしなかった。あなたの御手が私に臨んだので、私はひとりで座っていた。あなたが私を憤りで満たしたからである。なぜ私の痛みは絶えず、私の傷は癒やされることを拒んで癒やしがたいのか。あなたはまったく私にとって偽り者ようになり、涸れる水のようになるのか。それゆえ、主はこう言われる。もしあなたが立ち返るなら、わたしはあなたを再び連れ戻し、あなたはわたしの前に立つであろう。もしあなたが卑しいものの中から尊いものを取り出すなら、あなたはわたしの口のようになる。彼らをあなたのもとに帰らせよ。しかし、あなたは彼らのもとに帰ってはならない。エレミヤ書 15:17-19

エレミヤは、最初の失望のときに神が偽ったと考えたミラー派を代表している。神は偽ってはいなかった。単に、1843年の図表の誤りの上に御手を置いて隠しておられただけだった。エレミヤには、2020年7月18日に失望を経験した人々にも与えられているのと同様に、約束が与えられた。すなわち、もし彼らが失望の前から存在していた愚かな者たちやサタンの教えから分離するなら、そのとき主は、エレミヤと彼が象徴する人々を、ご自身の「口」とされる、というものである。1843年の図表は、ハバクク書第2章の命令を成就して作成された。

「『第二再臨』の講演者たちと諸新聞が、『本来の信仰』の上に立っていたとき、一致して証言していたのは、あの図表の出版がハバクク2:2, 3の成就であるということであった。もしその図表が預言の主題であったならば（そしてこれを否認する者たちは本来の信仰を去るのであるが）、それに続いて、紀元前457年を2300日の起算年であったことになる。1843年が最初に公表された時であることは必要であった。なぜなら、そのことによって『その幻』が『遅れる』べきであり、すなわち、ためらいの時があるべきであったからであり、その間に、おとめたちの一団は、真夜中の叫びによって目覚めさせられる直前に、この大いなる時の主題についてまどろみ、眠ることになっていたのである。」ジェームズ・ホワイト『Second Advent Review and Sabbath Herald』第1巻第2号。

主はハバククを通してミラー派に1843年の図表を作るよう命じられたが、その中には、主が御手で覆っておられた誤りが含まれていた。だからこそ、エレミヤは、自らの失望は神の御手によるものだったと述べている。失望の後、主がミラー派を再びハバクク書2章へと導かれたとき、彼らは、たとえ幻が遅れるようでもそれを待て、それは偽らず、終わりにには「語る」との約束を見いだした。

「幻が『語る』ということは、預言的メッセージの内容を表していた。また、エレミヤに与えられた約束は、彼が失望を振り払い、失望する前に持っていたメッセージへの熱意に立ち返り、さらに麦ともみ殻を区別するなら、彼は神の『口』となり、『真夜中の叫び』のメッセージを伝える、というものであった。」

この幻は、なお定められた時のためのもので、終わりにには明らかになり、偽りではない。遅れるように見えても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。ハバクク書 2:3。

第一と第三の天使の運動において、戻るようにとの命令を果たす、エレミヤに代表される者たちは、第一の天の戦場で、悪の連合に対する戦いにおいて、主の「口」となるだろう。彼らは「真夜中の叫び」のメッセージを告げる。エレミヤに代表される者たちは今、荒野で「声」を聞いている。三日半という象徴的な日々は、預言的な荒野を象徴している。

荒野で叫ぶ者の声がある。「主の道を備えよ。荒地で、私たちの神のために大路をまっすぐにせよ。」すべての谷は高められ、すべての山と丘は低くされ、曲がったものはまっすぐにされ、でこぼこの所は平らにされる。そして主の栄光が現れ、すべての人がともにそれを見る。主の口がこれを語られたからである。イザヤ書40章3-5節。

次回の記事で、第三の天で始まり第一の天で終わる試練の戦争の最後の戦いについての考察を続けます。

そのとき、すべてのミディアン人とアマレク人、そして東の人々が集まり、渡って来て、エズレルの谷に陣を敷いた。だが、主の霊がギデオンに臨み、彼はラッパを吹き鳴らした。すると、アビエゼル族が彼に従って召集された。彼はまた、マナセ全土に使者を遣わし、彼らもまた彼に従って召集された。さらに、アシェルとゼブルンとナフタリにも使者を遣わしたので、彼らは上って来て彼らに加わった。士師記 6:33-35。